

JOHA ニュースレター

第29号

日本オーラル・ヒストリー学会第13回大会 (JOHA13) 報告特集

9月12日(土)、13日(日)の2日間、日本オーラル・ヒストリー学会第13回大会が、大東文化会館(東京都板橋区)において、開催されました。4つの分科会、研究実践交流会、大会シンポジウムそれぞれにおいて熱い討議が繰り広げられました。また前日には高島平団地にてプレイベントも開かれました。

今回のニュースレターでは、会員みなさまに、このJOHA13の報告をするとともに、次回第14回大会の開催についてお知らせします。2016年9月3日(土)、4日(日)、会場は一橋大学(東京都国立市)です。プログラムの詳細は未定ですが、自由報告の分科会も予定しています。また改めてMLや学会HP上での告知・募集をいたします。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第13回大会報告・・・・・・・・・・2	II. 総会報告・・・・・・・・・・10 2014年度事業報告・決算報告・会計監査報告、 2015年度事業報告・予算案ほか
1. 大会を終えて	III. 理事会報告・・・・・・・・・・13
2. プレ企画	1. 第六期第7回理事会(9月12日)
3. 第1分科会	2. 第七期第1回理事会(9月13日)
4. 第2分科会	IV. お知らせ・・・・・・・・・・16
5. 第3分科会	1. 『日本オーラル・ヒストリー研究』 第12号投稿募集
6. 第4分科会	2. 会員異動
7. 研究実践交流会	3. 2015年度会費納入のお願い
8. 大会シンポジウム	
9. 大会参加記	

.....
*ニュースレター掲載のメールアドレスは、(at)部分を@に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第13回大会報告

1. 大会を終えて

JOHA13 大会は、2015 年 9 月 12 日～13 日、大東文化会館（東京都板橋区：開催校大東文化大学）にて行われました。駅から近い素敵な大学会館で、2 日間で延べ 132 名（参加費徴収 91 名）の参加者を数え、盛況でした。年会費納入済み参加会員には完成したばかりの学会誌 11 号をお渡しできました。自由報告は 4 つの分科会に分かれ、18 本の報告となりました。

1 日目の研究実践交流会「新自由主義の時代と文化を描く一若者研究の実践から」、2 日目のシンポジウム「多文化共生とオーラル・ヒストリーの力」は登壇者のみならず、フロアからも活発な議論が展開しました。会員のみなさまの参加とご協力に感謝申し上げます。何より、会場校担当の川村千鶴子理事には、会場の準備、懇親会の手配、教員・学生スタッフへの丁寧なご指示等たいへんありがとうございました。次回は 2016 年秋、一橋大学（国立市）にて開催されます。どうぞよろしく願いいたします。

（JOHA 第六期事務局長 川又 俊則）

2. プレ企画

プレ企画（ミニ・エクスカーション）として、大会実行委員長である川村千鶴子先生の本務校である大東文化大学の板橋キャンパスに隣接している高島平団地の地域コミュニティの実態に触れるフィールドワークを行なった。第 12 回大会の研究実践交流会では梅崎修氏による「神楽坂」を舞台にした学生によるオーラル・ヒストリーの実践が取り上げられた。赤嶺淳会員が所属するグローバルを歩く研究会では、「聞き書き」という方法を用いて地域の問題や魅力を発見し、地域づくりにつなげる取り組みが精力的に行われている。今回のプレ企画はこうした動向を受けて、高島平団地の地域コミュニティへのオーラル・ヒストリーの実践の実現可能性を探るといった目的も伏在していた。

今回のプレ企画の道先案内人は NPO 法人ドリームタウンの代表理事で、板橋区議会議員（無所属）の井上温子氏。井上氏は大東文化大学環境創造学部 3 年生の時から高島平地域のまちづくりに関わり始め、同大学卒業後は同大同学部事務室へ就職し、学部の地域連携事業の「みらいネット高島平」事務局を担当（コミュニティカフェ運営等）した。

プレ企画の当日は、井上氏の案内で 1 時間ほど高島平団地を実際に歩いた。その後、井上氏が NPO 法人活動拠点として開設した「地域リビング プラスワン」に場所を移し、井上氏から、1972 年に入居が開始され、現在は少子高齢化の課題に直面している高島平団地の実態と、そうしたなかで取り組んでいる地域コミュニティづくりの取り組みの具体的実態について話をいただき、参加者との質疑応答の時間を約 1 時間程度もった。

井上氏からは、ひとり暮らしで、孤独を感じている高齢者や、グローバル化が進む中で、異国で不安を抱えながら暮らしている外国籍の人たちが高島平団地とその周辺で増えるなかで、交代で今日のごはんをつくったり、お互いに得意なことを出し合ったりして学び合ったり、地域にもう 1 つ日常をシェアする「地域リビング」を持つことで、人と人とのつながりを生み出す活動している。さらに、無所属議員にとってこうした NPO 活動は住民のニーズを知る上でも重要であるということが語られた。

最後に企画者としての感想を述べたい。今回のプレ企画では、井上氏の地域コミュニティづくりの実

際に学ぶことに尽きてしまった感はある。しかし、住民もまた歴史的・社会的存在である以上、そのニーズを理解する上で「オーラル・ヒストリー」は不可欠ではないか。現在、さまざまな地域で少子高齢化のなかでの居場所づくりが展開しているが、こうした実践とオーラル・ヒストリーを結びつけていくことは本学会の実践的課題であり、そのことを今回のプレ企画は改めて浮き彫りにしたと思う。

(第六期研究活動委員 和田 悠)

3. 第1分科会

第1分科会では、記憶・経験を語り継ぐことや語りなおす営み、民俗芸能研究におけるオーラル・ヒストリーの意義、ライフストーリーから浮き彫りになる羅生門的現実についてなど、5件の研究報告がおこなわれた。

第1報告の岸衛(日本ライフストーリー研究所)「災害の記憶を『語り継ぐ』——『伊那谷三六災害』経験を聞く」は、戦後日本の社会問題(とくに災害や公害)に関するオーラル資料が、どのようなかたちで保管され、次世代に語り伝えられようとしているのかについての調査のひとつとして、伊那谷三六災害がとりあげられた。そして、ある家族の三六災害の語りから、「災害の何を語り継ぐのか」が報告された。

第2報告の桜井厚(立教大学)「戦後史の経験を語り継ぐ——ライフストーリーから見えてくること」では、水俣病やコザ暴動など、戦後史を構成する経験を語り継ごうとする活動を取りあげ、その活動の担い手の語りから、われわれが何を学び、次世代に何を伝えようとしているのかについて検討された。ライフストーリーで何が語られるのかの「何」に焦点をあてつつ、一回性の出来事をどのような経験として捉え、語り継ぐ活動を構成するものが何なのか報告された。

第3報告の佐々木加奈子(東北大学大学院)「『協働の場所』における故郷喪失のライフストーリー——浪江兆民による記憶の語り直し」は、原発事故を受けて仮設住宅で避難生活をおくる福島県浪江町民を対象に、語り手同士の対話を可能にする空間を設け(語り手が順繰り入れ替わる「協働の場」)、その収録映像も紹介しながら、「協働の場」における語りのパターンと意味づけの活性関係の考察をおこなった。

第4報告の川崎瑞穂(国立音楽大学大学院)「民俗芸能研究とオーラル・ヒストリー——五所八幡宮例大祭と鷺の舞を事例として」では、五所八幡宮例大祭とそこで演じられる鷺の舞の考察を通じて、民俗芸能研究におけるオーラル・ヒストリーの有効性が論じられた。民俗芸能の交流史が明らかになることや、民族芸能がダイナミックに動いている動態として考察できることなどが報告された。

第5報告の青木秀光(立命館大学大学院)「統合失調症の娘を抱える両親の羅生門的現実」は、両親がどのような思いで統合失調症をもつ娘と共に生きているのか、個別具体性を重視したライフストーリー分析から、父親と母親の意味世界の羅生門的現実の提示を試みた。セルフヘルプ・グループ論が提起するような諸機能に回収されえない語りなどに着目し、個性を備えた多様な親が存在するという視点をもつことの重要性が指摘された。

報告者が多い部会であったため非常にタイトなスケジュールで進んだが、それでも、語りなおしの協働の場における調査者の位置性の問題、データの欠落を補うこと以上のオーラル・ヒストリーの積極的視点、〇〇論に回収するのではなく語りそのものから見えてくるものの意義の再確認、というような本質的な質疑や指摘がなされ、有意義な部会となった。

(滝田 祥子・小倉 康嗣)

4. 第2分科会

第2分科会では、オーディエンス20名程度が参加し、なごやかな雰囲気のもと、以下の5つの発表がおこなわれた。2-1「社会運動調査に求められる倫理的課題——レイシズム／反レイシズム運動のフィールドから」(松岡瑛理・久木山一進)。近年、インターネット上で在日韓国・朝鮮人や韓国をターゲットとした人種差別的な書き込み、さらには在特会をはじめとする団体による排外デモが注目を集めると同時に、それらへのカウンター(対抗運動)にも注目が集まるようになった。報告者である久木山は在特会とも関わりを持つ愛国コミュニティ、また、松岡はそれらカウンター活動に関する調査をおこなってきた。対照的性質をもつフィールドでの調査を通じ、それぞれの団体が掲げる活動方針と調査者の保持する価値観との相違をはじめ、それぞれの活動への関与の仕方などを通じ、現在進行形で進むレイシズム問題を調査するにあたってのラポール構築に関する倫理的問題点について問題提起がなされた。これに対し、発表中でもちいた「立場性」という術語に対する解釈の問題、発表者2名が、たがいの調査にいかなる影響を与えたか、そもそも、こうしたヘイトスピーチなどが、従来、社会学でとりあげられてきた「社会運動」論の範疇におさまるものであるのか、といった質問がなされた。報告者からは、これらの活動団体が、従来の「社会運動」と差異化をはかりながらも、運動体としてどのように機能しているのかについても考察をおこなっていききたいとの見解が示された。

2-2「ノンセクトとしての『ひと』教育運動」(香川七海)では、『ひと』教育運動の参加者へのインタビュー調査を通して、この運動が同時期(1970年代)の日教組教育運動や民間教育運動のはざまに第三の選択肢として誕生したものであるとの仮説を提示した。『ひと』教育運動は、1970年代から90年代にかけて展開された運動で、既存の教職員組合教育運動や教師が主体となる教育運動ではなく、市民が「個」として参加し、活動することを目的とした運動である。当時、教育運動の一部分が政党性に拘束されていたなかで、ラディカルな教師たちは、「子どものための教育運動」を理想とし、ノンセクトとして展開された『ひと』教育運動に参加したのであった。会場からは、もう少し1960年代後半に世界を席卷したNew Left運動の動向を視野に入れるべきではないか、関係者のインタビューだけではなく、雑誌『ひと』の分析も並行しておこなうべきではないか、分析対象として抽出されたインタビューは、『ひと』教育運動に関わり続けている元教師が、みずからの参加動機を正当化する語りに偏っているのではないかと、といった指摘がなされた。また、『ひと』教育運動が展開した時代の思想を深く掘りさげたいと、インタビューの語りを考察することが今後の課題として挙げられた。

2-3「環流するアジアの労働力：インドネシア人技能実習生の同胞リクルートとハビトゥス変容」(山口裕子)。近年の経済のグローバル化を受けて活発化、多元化するアジアの国際労働力移動の中でも、故地に帰還した元技能実習生による地元青年の送り出し事業(同胞リクルート)で来日したインドネシア人技能実習生を対象に聞き取り調査を行い、日本社会への適応過程と困難や工夫、ネットワーク形成の動態、ハビトゥス(態度、性向)や価値観変容の萌芽的状况を中心に考察した。そのことにより、当該制度の持続を可能にする外国人技能実習生の環流と、それを下支えするメカニズムとしての、実習生同士の情報ネットワーク、なかでも研修生候補として選別される際に「適正」が厳しく査定されることをあきらかにした。会場からは、「同胞」と「同朋」のことばが混在しているので、どちらかに統一するべきではないか、研修生の語りにインタビューの場が与える影響を考慮した分析がもう少し必要なのではないか、といった指摘がなされた。報告者からは、従来の労使の構図では捉えきれない、外国人技

能実習生の参加動機や日本での生活実態を踏まえた制度の考察が必要であることが、今後の課題として提示された。

2-4「男女賃金格差は能力格差だ——男子進学校卒業生のその後 当時の発言を振り返る」(大矢英世)。1994 年度より、それまで女子のみ必修科目であった高校家庭科が、男女必修科目となった。制度上は男子も学ぶ家庭科となり、教科書の内容も一新した。しかし、男子校進学校における家庭科の定着には時間がかかり、2006 年には男子進学校の家庭科未履修問題がマスコミで取りあげられている。報告者がこれまで実施してきた男子進学校の家庭科教員へのインタビュー調査からは、男子進学校における家庭科の導入には、さまざまな困難が積みまとったことが見えてきた。その中で家庭科開設当初に家庭科教員を最も悩ませ、反抗的な態度を繰り返していたという男子進学校卒業生へのインタビュー調査を実施し、その語りからその生徒が育った家庭環境や、その後の人生経験が与えた価値観の変遷と今日における家庭科教育の課題を考察した。会場からは、男子生徒のジェンダー観を揺り動かす教科としての家庭科の可能性が、インタビューの語りからどのようにあきらかにされているのかについて、もう少し説明を加えてほしいとの指摘がなされた。家庭科が固定化したジェンダー観を捉えなおす学びの場となるためにも、家庭科の授業実践のあり方についての考察がインタビュー調査からさらに深められていくことが期待される。

2-5「海外生活が駐在員の配偶者の家族観に与える影響——4 人の配偶者女性の語りから」(三浦優子)。駐在員の配偶者女性たちは、仕事や勉学という目的からではなく、自分の意志とは無関係に、夫に帯同して海外に渡航する。4 人の配偶者女性たち(いずれも帰国後に「海外生活企業アドバイザー」を経験)に、滞在中に、転機やインパクトがあったと思う出来事などを、帰国して数年たった「今・ここ」で振り返りかえり、自由に語ってもらうことにより、自己との向き合い方もふくめ、夫や子どもとの関係が、海外生活により、どのような影響を受けているのかを考察した。会場からは、「海外生活企業アドバイザー」非経験者の配偶者女性たちの海外駐在経験についても、インタビューからあきらかにする必要があるのではないか、夫婦関係の変容を問ううえで、家族以外の人との出会いや関わり方に焦点化した考察も必要なのではないか、といった指摘がなされた。渡航前の仕事の有無に関わらず、渡航後は専業主婦として、家事・育児に専心することになる経験を、彼女たちはどのように捉えなおそうとしているのか、インタビューの語りからより丹念に考察されることが期待される。

(越川 葉子・赤嶺 淳)

5. 第3分科会

本分科会では、障害を持つ当事者研究とライフストーリー、自己エスノグラフィーとの関係、看護ケアを語り合う空間の意義や意味など4つの報告がなされた。

第1報告「誰のためのライフストーリー研究か? 誰もが人生を物語ることができるのか? —ライフストーリー研究がもつ発達障害者のアイデンティティ再形成促進可能性—」田野綾人(立教大学大学院社会学研究科)。広汎性発達障害者の場合、アイデンティティが拡散してしまい、自らの生活や人生を「物語る」ことが困難である。しかし、現在ますます語りの重要性が認識され、ライフストーリー研究の重要性が増すなか、いかにしたら発達障害当事者の「物語」が構築可能なのだろうか。報告者は「対話的構築主義」の意味を確認しつつ、権力を当事者へ押しつけない共同制作者としてのライフストーリー研究者の姿の可能性を模索された。

第2報告「障害児の姉のライフストーリー—ブラダー・ウィリーの妹—」渡邊文春（松山大学大学院社会学研究科）。障害ある妹のことを「そんなに障害というほどでもない」「普通の姉妹」だと「困難を感じていない」障害児の姉の語りに触発され、報告者は障害児家族の現実を彼らの語りからくみ取ろうとした。家族の「暗黙の了解」に秘められた「家族の文化」を解読すべきという課題が呈示された。

第3報告「ある神経難病当事者の自己民族誌（自己エスノグラフィー）」鈴木隆雄（千葉大学大学院人文社会科学研究科）。障害当事者の「自画像」や生きて在る現実や歴史はどのようにして把握し得るのか。報告者は当事者でしか語り得ない事実を語りだし当事者がその事実を当事者の視点で解釈し評価し得るという「自己エスノグラフィー」という実践がもつ意義を主張する。報告者自身の具体的な事例解釈から、この実践が支配的文化から語られる「他画像」のゆがみや研究者がもつ「暗黙知」が例証された。障害当事者が少しでも生きやすくなることへの貢献として「自己エスノグラフィー」の可能性が主張された。

第4報告「看護ケアと語り—拒否的態度の患者に寄り添う看護師の語り—」塚田守（椋山女学園大学）。看護ケアの実践者が自由に発言し各自の経験を共有し互いに批判することなく、それぞれの意見を尊重し語りあうこと自体に意義を見出している空間がある。長年そこに参加してきた報告者は拒否的態度の患者にいかに寄り添うのかをめぐる具体的な語りあいを詳細に検討したうえで看護師が自由に看護ケアでの悩みを表現し、共有する場を医療現場に設置する必要性を主張した。

（鶴田 真紀・好井 裕明）

6. 第4分科会

司会は、有末賢と荒沢千賀子が担当した。プログラムでは5つの報告が予定されていたが、最初の報告が事前にキャンセルになったため、1つずつ繰り上げて、第3分科会と同様に、4つの報告が行われた。

第1報告は、嶋田典人（香川県立公文書館）「戦後70年にあたって～様々な戦争体験から～」であった。香川県内在住の二人の戦争体験者からの「聞き取り」調査を報告された。一人は、炭山勤労報国隊として九州での炭鉱（炭坑）で労働に従事、その後、郷里に帰り、詫間海軍航空隊の造成工事、徴兵後は佐世保で海軍に所属、佐世保空襲をも体験した方であった。もう一人は、満蒙開拓青少年義勇軍所属、戦後のシベリア抑留と様々な体験をされている二人の語りが報告された。戦後70年という今日にオーラル・ヒストリーを聞く意味について、フロアとの間で議論がなされた。

第2報告は、渡部春奈（一橋大学大学院）「戦争体験をめぐる語り—インド・ナガランド州の事例をとおして—」であった。報告者は、インパール作戦の激戦地であったインド北東部・ナガランド州において、現地の人々が日本兵との出会いなど、共通するパターン化された語りが見られる一方で、地域の観光化など、発展につなげようとする村の取り組みにも注目している。柔軟な語り直しについて、フロアとの間で質疑応答が行われた。

第3報告は、深谷直弘（法政大学）「平和案内人の活動実践と原爆記憶の継承」である。2004年に設立された長崎のボランティアガイドである平和案内人の活動者を取り上げ、実際にどのような継承実践が行われているのかを明らかにした。平和案内人たちは、被爆者であっても、幼い頃の記憶であったり、被爆後何十年も経ってから、被爆体験を語り始めたりしている。戦後の彼らの生活史の中に、平和案内人としての「継承」の意識が立ち現れる契機が潜んでいると思われる。政治活動の面からだけでなく、

社会運動と生活史を考察する上で示唆的な報告であった、と思われる。

第4報告は、加瀬豊司（四国学院大学名誉教授）「認識の真実：オーラル・ヒストリーの戯曲化」であった。報告者は、日系アメリカ人の歴史の専門家で、アメリカで出版した日系人のオーラル・ヒストリーを原本として、この度、演劇の戯曲が書かれ、専門の演出家をとおして、演劇として上演された。その戯曲化をとおして、「読む」「聞く」「観る」の共振感情によって、語りの内容の鮮明化を目指していた。細かい史実と感情の「真実」との関係について、オーラル・ヒストリー学会では、今までそれほど論じられてきたことはなかったが、認識や継承について考える良い機会であったと思われる。

戦後70年の節目を意識した、それぞれの意義ある報告であったと思う。

（荒沢 千賀子・有末 賢）

7. 研究実践交流会

今年度の研究実践交流会は「新自由主義の時代と文化を描く——若者研究の実践から」と題して中西新太郎氏（横浜市立大学名誉教授）に登壇していただいた。中西氏はオーラルヒストリアンではない。だが、リチャード・ホガート（『読み書き能力の効用』）、レイモンド・ウィリアムズ（『文化と社会』）、ポール・ウィリス（『ハマータウンの野郎ども』）の系譜をたどることのできるイギリス労働者文化研究に深く精通している。他方で1990年代以降の新自由主義時代にあつて社会的関係を結ぶ様式そのものが変容し、社会化一般が困難に見舞われているノンエリート青年の労働と生活について、若手研究者をとともに研究会をたちあげ、参与観察やライフストーリー分析などの多角的な手法によって描き出す『ノンエリート青年の社会空間』（大月書店、2009年）の編著を刊行するなど、一般に知られている社会学の若者研究とは異なる、独自の若者社会文化研究をてがけてこられた。中西氏の仕事や発想と論理は本学会の学問運動と呼応しているように思われるが、これまで中西氏の文化研究について本学会として正面から検討してきたことはなかった。こうした事情から、今回の研究実践交流会では中西氏に問題関心やこれまでの研究成果について講演していただき、その後に質疑応答するなかで、本学会や広くオーラル・ヒストリー研究との接点を見出そうということを課題とした、

報告は、中西氏が近年取り組まれ、まとめられた『「問題」としての青少年—現代日本の“文化-社会”構造』（大月書店、2012年）での議論を軸にしながら、現代日本社会における若者の社会化様式について、ライトノベル作品を取りあげ、そこでの「語り」や「表現」を捉え返すことで、社会的承認をめぐる文脈における現代の青少年の生きづらさを明らかにするものであった。

若者たちによる若者たちの物語としてライトノベルの世界を内在的に理解し、現代日本の若者たちが感じ、受けとめている世界（自己と自己にかかわる社会のすべて）のありさまを、ともに社会を形成していく仲間として批評する点に中西流の読みは始まる。本学会にとって「語り」なり「表現」なりをどのように分析するのかという問題は実際的で切実な課題であり、中西氏は報告のなかでそれを実践してみせたのであり、講演会という形式ではあったが、一つの研究実践交流の場として成立していたといえよう。

（和田 悠）

8. 大会シンポジウム

「多文化共生とオーラル・ヒストリーの力」

2015年は、戦後70周年、国連創設70周年に当たる。

かつて人びとは焼け野原に立ち、人間の生存環境と平穏な日々を希求して絶え間ない努力を続けた。めざましい経済発展を遂げ、グローバルな人の移動の時代を迎えている。しかし、中東地域の紛争や過激な無差別テロ事件が絶えず、難民や国内避難民の数は過去最大に激増した。その背景には軋轢や差別の連鎖、格差の分断があり、多文化共生への新たな構築の必要性を訴えている。

経済的格差、教育格差、性・年齢による格差、障がいの有無、国籍の有無、他宗教への無理解に起因する社会の分断を防ぐために、私たちは、オーラル・ヒストリーの力に着目した。

その理由は、オーラル・ヒストリーは、多様な人生に寄り添い、人びとの差異を明らかにする実践であり、他者の人生に寄り添う態度が、相互の親密な関係性や共感を伴う連帯を築いていくからである。オーラル・ヒストリーは、人を国籍や民族で判断するのではなく、文化の存続とアイデンティティにおける異種混濁性と「気づき愛」を創出するからである。

歴史資料から排除されがちであった人びとの証言を拾い、多文化共生への努力を蘇えらせることができる。その語り継ぎが、街の由緒を生成し、地域コミュニティを形成する土台になっている。

多文化共生社会とは、単に文化的多様性を尊重するだけではなく、移民、難民、無国籍者、障がい者、亡命者、母子家庭など社会的弱者の人生をかけがいのない人生と捉え、隣人として相互に多文化意識を培って発展していく社会である。

本シンポジウムでは、格差社会の分断を防ぐために、将来を担う若者たちの多文化意識を高めていくオーラル・ヒストリーの教育実践に着目する。日本で遅く生きる難民をパネリストに迎え、彼らのオーラル・ヒストリーを中心に、難民・アイデンティティ・無国籍・シティズンシップなど多文化共生のキーワードを討論する。フロアの方がたと共にオーラル・ヒストリーの力に照射する。

(日本オーラル・ヒストリー学会第13回大会委員長 川村 千鶴子)

9. 大会参加記

*今回は、2名の会員の方に、JOHA13大会の参加記を作成していただきました。

○第13回大会に参加して

長崎大学大学院生 富永 佐登美

大会への参加は二度目ですが、JOHAの大会では、研究者に加え様々な社会人の方も参加されるためか、柔らかい、誰しもを受け入れるような独特の空気を感じます。地方の社会人院生で、知り合いが少ない私も緊張せずに参加することができました。

今回のレジュメや自分のメモを見直すと、「多面性」や「多角的に」、「多様性」といった言葉がしばしば出てきます。正史やマスターナラティブに含まれない部分を掘り起こすという、オーラル・ヒストリー研究にとってもっとも根本的な視点が尊重されていることを強く感じました。

とりわけ、シンポジウムでは、日本における多文化共生の現状がテーマとなっており、各シンポジストの方々による経験談は非常に興味深かったです。日本にも、今後一層、さまざまな事情を抱えた移民、難民の方がいらっしやると思いますが、中西新太郎先生が言われた「マイノリティを対象とした、市民

による抵抗運動としてのオーラル・ヒストリー研究」の蓄積を役立てるような社会であってほしいと思います。

研究実践交流会では、中西先生が、これまで不足していた視点・論点を用いて若者文化を検討した成果を講義されました。対象をマイノリティにするのではなく、対象はなんであれ、論点や検討方法により、これまで隠されていた問題点が前景化してくるということを再認識しました。

最後に、今回の大会では、大学院生などの若手に対して、先輩諸氏が研究に取り組む姿勢そのものをご教示くださる場面が見られました。先行研究への徹底したアプローチが必須である、そうすることによって自身の研究を明確にし、深めることができる、というエールと受け取りました。率直に教えていただける有難さと、JOHA においては多様で自由な発言が自然に受容されていることを実感しながら、二日間の日程を過ごしました。

主催の先生方、役員の方々、おつかれさまでした。ありがとうございました。

○JOHA 大会の味わい深さ

日本学術振興会特別研究員 矢吹 康夫

9月12日・13日に大東文化大学で開催された第13回日本オーラル・ヒストリー学会では、JOHAらしい多様な報告にふれることができました。ここで言うJOHAらしい多様な報告とは、並行して行われている分科会が2つしかないにもかかわらず、興味のある報告を聞くために、その2つを行ったり来たりしてしまう多様さです。私自身は、障害学が専門で差別問題にも関心があるし、一方で震災のフィールドワークという授業も担当しているので、今大会もたびたび教室を出たり入ったりしました。この点、退席してしまったときの報告者のみなさまには失礼になってしまいました。この場を借りてお詫びいたします。

また、懇親会の挨拶や分科会の司会のときに好井裕明会長が「JOHAでしか聞けない報告」「ゆっくり議論できる時間」ということをくり返し話していました。それをふまえるとたとえば、青木秀光さん（第1分科会）の語りの読み上げのうまさだとか、松岡瑛理さんと久木山一進さん（第2分科会）の調査者としての葛藤だとか、鈴木隆雄さん（第3分科会）の事例のリアルさなどがJOHAらしい報告に感じられました。よその学会だったらしよっていたかもしれないディテールの味わい深さにふれ、自分の調査経験を省みながら報告内容が共有できていくと「あー、JOHAにきたんだなー」と安心します。

そういえば、私がJOHAで報告したのは2011年に松山大学で開催された第9回大会でした。そのときの研究実践交流会で、小倉康嗣さん（今大会では第1分科会司会）が「セルフヘルプ的コミュニケーション」という言葉をたびたび口にしていました（JOHAニュース21号参照）。自分の調査経験に引き寄せて「セルフヘルプ的」に「ゆっくり議論できる」というのもJOHAの特徴であり、今大会も分科会の全体討論でそれを感じました。ついでに言うと、どうにもせわしないよその学会だと「あー、〇〇にきたんだなー」と身構えるので、懇親会をパスすることも多いのですが、その点JOHAは、自分が報告していようがしていまいが気楽に懇親会に参加できるので好きです。

Ⅱ. 総会報告

2014 年度総会（第 12 回総会）

日時：2015 年 9 月 13 日（日）12：15～12：50

場所：大東文化会館ホール

会長挨拶、議長選出（佐々木てる会員）の後、以下の議案が諮られた。

第 1 号議案 2014 年度事業報告

2014 年度（2014. 9. 1～2015. 8. 31）事業報告について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員数の現状

前回学会以降、2015 年 3 月末までの新規入会者は 31 名（一般 14 名、学生他 17 名）。2 年間の学会費未納による自動退会者、自己申告退会もあった。第 13 回（JOHA13）大会より、学会大会発表参加資格を、当該年度の新入会員も可能としたところ、4 月以降の入会も堅調となり、10 名（一般 4 名、学生他 6 名）あった。8 月 31 日現在の会員は 245 名（一般 155 名、学生他 90 名）である。これは昨年同時期と比べ 3 名減である。

2. 第 12 回（JOHA12）大会の実施と第 13 回（JOHA13）大会の開催

第 12 回大会は、2014 年 9 月 6～7 日の二日間にわたって日本大学文理学部（東京都世田谷区）で開催した。自由報告は 4 つの分科会に分かれ、19 本が報告され。大会初日には、研究実践交流会「オーラル・ヒストリーを用いた大学の教育実践」を、大会二日目には、シンポジウム「オーラルヒストリーで編み直す放送史」を開催。自由報告の司会 2 人制、事務局管理のバックナンバー自己申告制配布を新たに試みた。広報活動として A4 判の掲示ポスターを作成。後藤一樹会員にデザインを引き受けていただき、学会 HP に掲載し、学会理事を中心に広報に努めた。2 日間で延べ 122 名（参加費徴収 83 名）が参加。

第 13 回大会は、2015 年 9 月 12～13 日の二日間、大東文化会館（東京都板橋区：開催校大東文化大学）で開催する。

3. 学会誌 10 号の発行と 11 号の編集・発行

2014 年 9 月に学会誌第 10 号を発行し、学会大会時に会費納入済会員の参加者へ配布し、不参加者や後日納入者にはインターブックス社から配送した。11 号の編集作業は順調に進み、例年通りの発行を予定している。会費納入済会員の第 13 回大会参加者には会場で、不参加者および会費未納者は納入確認後、インターブックス社より配送を予定している。

4. ワークショップの開催

2015 年の学会大会前日（9 月 11 日午後）に高島平団地（東京都板橋区）で「高島平団地ツアー」および、プレ企画「地域コミュニティづくりからオーラル・ヒストリーへ」を実施予定。

5. ニュースレターの発行

ニュースレターは第 12 回大会後、第 13 回大会の間に、27 号（2014 年 12 月 22 日）と 28 号（2015 年 8 月 2 日）を発行した。広報委員 2 名が編集分担した。会員メーリングリストでの配信を基本とし、郵送会員若干名には、事務局から郵送した。

6. ウェブサイトの充実

ウェブサイト (<http://joha.jp/>) を学会事務局と広報委員会が管理運営している。

7. 会員相互の交流の促進

会員メーリングリストを通じた会員相互の情報発信が適宜なされている。

8. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流

国際交流担当理事を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行った。

9. 次年度理事選挙

理事改選期にあたるため、2015年3月末に選挙権・被選挙権の確認を行い、選挙管理委員会を設定し、第7期理事選挙を実施した。

10. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が2016年度に終了となることに対して、本学会では、J-STAGEへ参加をすることとした。詳細は次期理事会にて決定する。

第2号議案 2014年度決算報告

2014年度(2014.4.1~2015.3.31)決算報告資料に基づき報告され、了承された。

第3号議案 2014年度会計監査報告

山田富秋監事と折井美耶子監事より「会計帳簿、預貯金通帳、関係書類一切につき監査しましたところ、正確で適切であることを認めましたので、ここに報告いたします」と報告があり、了承された。

第4号議案 2015年度事業案

2015年度(2015.9.1~2016.8.31)事業案について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員の拡大と維持

年次大会やワークショップなどの実施を確実にを行い、これらの情報を広報することで、本学会の周知に努め、会員数の拡大を目指す。会員の維持と会費収入確保のため、大会後、年内を目途に郵送による入金状況確認を行い、会費納入の督促を行うと同時に未納退会者を防ぐようにする。

2. 第13回(JOHA13)大会の実施と第14回大会(JOHA14)の準備

第13回大会を2015年9月12~13日の二日間にわたって大東文化会館(東京都板橋区:開催校大東文化大学)において開催する。自由報告は4つの分科会に分かれ、18本の報告を予定している。研究実践交流会「新自由主義の時代と文化を描く一若者研究の実践から」および、シンポジウム「多文化共生とオーラル・ヒストリーの力」を開催予定。昨年度同様、広報活動としてA4判の掲示ポスターを作成(後藤一樹会員にデザインを引き受けていただき、学会HPに掲載し、学会理事を中心に広報に努めている)。来年度の第14回大会については2016年秋に二日間、一橋大学(東京都国立市)での開催を予定している。

3. 学会誌第12号の発行

学会誌第12号は、第7期理事会の編集委員会によって、JOHA13のシンポジウムと自由投稿をもとにして編集する方針である。執筆要領、投稿規定を改定し、電子メール添付での応募を可能にする。

4. 研究会・ワークショップの開催

新理事担当者によって、研究会・ワークショップの開催を検討・提案する予定である。

5. ニュースレターの発行

JOHA13 後に大会報告を中心にしたニュースレター第 29 号を、JOHA14 前に大会プログラムを中心にした第 30 号の発行を予定している。

6. ウェブ情報の充実と改善

学会ホームページをさらに見やすく整備するとともに、適宜更新していく。

7. 会員相互の交流促進

学会 HP や会員メーリングリストの活用、ニュースレター配信を通じて、会員相互の交流を促進する。また、会員の出版、活動情報についても学会誌での書評等を通じて積極的に共有する。

8. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流

理事および関心ある会員を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行う。

9. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が 2016 年度に終了となる。それへの対応へ準備を進める。

第 5 号議案 2015 年度予算案

2015 年度（2015. 4. 1～2016. 3. 31）の予算案資料に基づき提案され、了承された。

第 6 号議案 理事選挙結果報告

「学会会則」第 6 条 3 項（理事の選出は年会費を払った正会員の選挙による。選挙規程に関しては、別に定める）および「理事選挙規程」に則り、2015/2017（第 7 期）理事を選出する選挙を実施しました。2015 年 5 月 19 日、鈴鹿大学短期大学部にて選挙管理委員会を開催し、2015/2017（第七期）理事選挙（5 月 14 日必着）の開票作業を行いました。投票状況は以下の通りです。

郵送による投票総数：51

白票による無効投票：0

被選挙権該当者以外への投票による無効投票：1

3 名以内連記の投票総数：150

選挙管理委員会では、会員投票による選出理事の確定が目的です。選挙結果に基づき、選出理事（上位 8 名）を 6 月 5 日（立教大学）に招集しました。その結果、2015/2017（第七期）理事会構成案が総会で提案されます。

日本オーラル・ヒストリー学会 2015/2017 選挙管理委員会(五十音順)

門池啓史 川又俊則 藤喜一樹

第 7 号議案 第七期理事会の承認

理事選挙結果に基づき、選出理事（上位 8 名）を 6 月 5 日（立教大学）に招集し、理事会のメンバーを選出した。理事会構成員の互選の結果、以下の理事会構成案が提案され、承認された。

【2015/2017 第七期 JOHA 理事会】

会長：有末賢

事務局長：佐々木てる

会計：中村英代

監事：塚田守、小倉康嗣

(第六期事務局長 川又 俊則)

Ⅲ. 理事会報告

1. 第六期第7回理事会議事録

日時：2015年9月12日（土）11:00～12:00

場所：大東文化会館 ホール

出席：好井、赤嶺、有末、岩崎、小倉、川又、川村、小林、田中、橋本、宮崎、八木、和田

欠席（委任）：桜井、塚田

1. 議事録記載者確認（輪番岩崎理事）

2. 学会大会について

(1) 日程・会場等確認

- ・総会は、研究実践交流会・シンポジウム会場（ホール）。
- ・第4分科会第1報告佐藤けあき会員が家族の事情で報告辞退。（すでに、他の報告者には繰り上げ了解済み。当日配布のプログラムには、4報告のみ掲載）

(2) 総会議案確認

- ・「第3号議案」（2014年度会計監査報告）関連。折井監事から、①賛助会費とワークショップ収入がゼロであったため、賛助会費に関して方策を講じる、ワークショップを開催する、②繰越金が多いが、人件費等にしわ寄せがいないか配慮が必要、との指摘があった。
- ・「第4号議案」（2015年度事業案）来年度第14回大会は、2016年秋に一橋大学での開催を予定。開催校理事は、赤嶺理事、小林理事。学会誌第12号から電子メール添付での応募を可能にする。
- ・「第5号議案」（2015年度予算案）の「支出」のうち、「大会運営費」は例年通りの額である（昨年度は、大会開催校の補助金があったため、少ない予算額であった）。
- ・「第7号議案」（第7期理事会の承認）の理事会構成案について。編集委員の今野日出晴氏が非理事であることを現理事会でも認めてほしい。

(3) その他

- ・受付で学会誌のバックナンバーを希望者に配布する際に「金額は自由に」というと受付担当者が困るので、最低金額を決めてほしい。⇒「500円以上」とする。
- ・懇親会費4,000円を支払った人には、ネームカードに赤いシールを貼って、本を配布する。会場貸切（10万円）のため、25人以上は参加してほしい。

- ・明日（13日）は、全館ともJOHAで使用するので、空いている部屋は使用可。
- ・学会大会の開催時期についてだが、この時期は大学が休みで学生たちも少ない。開催時期について検討してもよいのではないか。

3. 各委員会報告

【編集委員会】

- ・学会誌第11号完成。
- ・分科会司会者から報告者に、学会誌への投稿を促してほしい。

【研究活動委員会】

- ・9月11日（金）に大会プレ企画として高島平団地ツアーを実施した（参加者8名）。

【広報委員会】

- ・HPに学会誌のバックナンバー一覧を掲載した。
- ・川村理事の紹介で、『国際人流』に学会大会の案内を掲載していただいた。

4. 事務局報告：事務局

- ・新規入会堅調。
- ・事務局保管物は、新事務局（青森大学）へ送付済み。

5. その他

- ・分科会の司会者2人の役割分担は、それぞれの分科会で決める。NLに掲載する分科会報告は、理事が担当する（非理事に対する司会者依頼の際に、NL報告執筆の依頼をしていないため）。
- ・有末新会長より。事務局長、会計、各委員会の引き継ぎをしてほしい。新理事会の研究活動委員会のメンバーのうち明日（13日）出席できない人がいるので、例年の1月・6月開催より多めに理事会を開きたい。
- ・学会誌第12号に掲載する特集等の執筆担当者を確認。

（岩崎 美智子）

2. 第七期第1回理事会 議事録

日時：2015年9月13日（日）

場所：大東文化大学

参加：有末、佐々木、中村、岩崎、小林、佐藤、山田、赤嶺、蘭、八木、桜井、川又（順不同）

委任欠席：好井、大門、平井、人見

1. 議事録記載者確認（輪番佐々木理事）

2. 会長挨拶

- ・2年間の学会運営について有末会長より挨拶があった。

3. 理事紹介

- ・担当理事の確認と役割分担の確認が行われ、各自挨拶があった。

会長：有末賢

事務局長：佐々木てる

会計：中村英代

編集委員長：赤嶺淳

編集委員：好井裕明、岩崎美智子、山田富秋、今野日出晴

研究活動委員長：蘭信三

研究活動委員：大門正克、平井和子、佐藤量、人見佐知子

広報委員長：八木良広

広報委員：桜井厚、小林多寿子

監事：塚田守、小倉康嗣

4. 理事会の開催時期と場所

- ・次回は上智大学で開催することが決定した。
- ・今期の2年間で、大会を含め、4回をめぐりにシンポジウム・ワークショップを行いたい。
- ・年間予定を作成し、第二回の理事会を開催してはどうだろうかとの提案があった。

5. 編集委員会より

- ・電子図書事業 J - STAGE への参加は決定したので、どのような手続きで掲載するか詳細を決定していく必要がある。電子化する際に、外部委託により手数料が発生する可能性がある。そのため手数料を請求する可能性も考える必要があるのではないか。
- ・昨年度は 300 頁を超える学会誌になったので、少し議論が必要である。
- ・毎年 3 月 31 日締め切り、9 月発行予定のため、査読などはできるだけすみやかに進めるように依頼があった。理事でない先生方に査読担当を依頼する可能性があるため、その点も考えていきたい。

6. 広報委員会

- ・ホームページの管理、ニューズレターの発行、できれば会員の声も反映させていきたい。
- ・ホームページのリニューアルも行いたい。

7. 事務局より

- ・大会開催校の場所に関して、東京とそれ以外を交互に行うことを考えて、設定できるといいのではないか。
- ・大会が東京以外では難しい場合は、ワークショップでもいいのでは。

8. 会計より

- ・J-STAGE に移行すると、著作権料収入がなくなるので補填を考える必要もある。
- ・大会受付が会計のみでやっているため、開催校アルバイトとともに、次回以降理事への手伝いも依頼があった。

9. その他

- ・一橋の次の開催校として関西の大学を考え行きたい。
- ・ワークショップのテーマとしては、「3.11 とオーラルヒストリー」「オーラルヒストリーのアーカイブ化」について考えている。
- ・「戦争とオーラルヒストリー」というテーマも考えられる。
- ・次年度開催校一橋大学の日程について、小林理事より 9 月の第一週末である 3 日と 4 日ではどうかと提案があった。
- ・シンポジウムは研究活動委員と相談しつつ、開催校企画も考えていく。

- ・ 次回の理事会は一橋での大会の原案を考える。
- ・ ニュースレターの発行は 12 月中旬を予定している。
- ・ 編集委員より事務局にメール作成の依頼が行われた。

(佐々木 てる)

IV. お知らせ

1. 『日本オーラル・ヒストリー研究』 第 12 号 原稿募集

論文、研究ノート、聞き書き資料、書評、書籍紹介の原稿を募集いたします。掲載を希望される方は『日本オーラル・ヒストリー研究』第 11 号の投稿規定・執筆要項を参照の上、以下の編集委員会メールアドレスまで原稿を送付ください。

提出原稿は、査読審査を経たのち、6 月中旬ごろに掲載の可否が決定します。

次号より原稿の提出は、メールで添付することとなりました。また、以下のアドレスも、『日本オーラル・ヒストリー研究』第 11 号に掲載されているものと異なっています。ご注意ください。

学会大会で発表されたみなさんをはじめ、会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。投稿に関し、質問があれば、お気軽に以下の問い合わせ先にお訊ねください。

締切：2016 年 3 月 31 日（木曜日）必着

応募原稿送付先：joha_journal@ml.rikkyo.ac.jp

問い合わせ先：joha_journal@ml.rikkyo.ac.jp

*技術上の問題により、学会誌への原稿の投稿先を以上のアドレスに変更いたします。会員のみなさまにはご迷惑をおかけしますこと、お許しください。

(編集委員長 赤嶺 淳)

2. 会員異動 (2015 年 9 月 13 日から 11 月末日まで)

(1) 新入会員 (入会順)

井口博充	大東文化大学
伊藤康貴	関西学院大学
小黒 純	同志社大学
笹山志帆	日本大学
尾田裕加里	日本女子大学
佐藤留美	静岡県立大学

(2) 退会

なし

※連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

（事務局長 佐々木 てる）

3. 2015 年度(2015.4.1～2016.3.31)会費納入のお願い

いつも学会運営へのご協力ありがとうございます。

本学会は会員のみなさまの会費で成り立っています。今年度の会費が未納の方におかれましては、何とぞご入金ほどよろしくお願いいたします。会費が未納入な方には、学会誌を発送できておりません。会費の納入が確認できましたら、速やかに学会誌を発送させていただきますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

■年会費

一般会員：5000 円 学生・その他会員：3000 円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票（ゆうちょ銀行にある青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキューウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきます。控えは必ず保管してください。

学会会計全般について、またご自身の入金状況を確認したい場合は、

会計担当の中村英代（電子メール:hideyonm@gmail.com）までお問い合わせください。

(会計 中村 英代)

.....

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニュースレター第29号

2015年12月28日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒030-0943 青森県青森市幸畑二丁目3番1号

青森大学 社会学部社会学科 佐々木研究室

Fax 017-738-0143

E-mail joha.secretariat[at]ml.rikkyo.ac.jp
